

令和2年度 北九州市発達障害者支援地域協議会 議事録

1 会議名 令和元年度 第4回 北九州市発達障害者支援地域協議会

2 開催日時 令和2年7月30日(木) 19:00～20:40

3 開催場所 web会議

4 出席者

(1) 委員(敬称略)

中村貴志、倉光晃子、長森健、天本祐輔、尾首雅亮、黒木八恵子、森本康文、シャルマ直美、森永勇芽、伊野憲治、森山謙治、國友信次 計12名

(2) 事務局

発達障害担当課長 安藤卓雄

(3) 基調講演講師

神崎淳子(北九州市自閉症児者の未来を考える会)

5 会議次第

(1) 委員紹介

(2) 基調講演

北九州市自閉症児者の未来を考える会 神崎 淳子 氏

(3) 意見交換

6 会議経過(意見交換)

【神崎さん】

大学、短期大学、塾など合計4箇所で、英語の講師をしている。

6人兄弟の長女として育ち、子どものころは明るく素直で元気な子どもであった。

小学校1年生のときからフラッシュバックの症状があり、その恐怖感があったものの、小学校のときは違和感なく生きてきた。中学校のときに周りから浮いてきたとを感じるようになった。英語を好きになったのは、中学校のときに出会った英語の先生に教わったことがきっかけになった。

普通の公立高校に進学後、軍隊みたいな生活の中で違和感を覚えながら、英語にのめり込むことで高校生活を乗り切った。その後大学に進学し、周りから浮いていることを感じていたけれども、人目を気にしない性格のため、英語だけに取り組んで大学生活も乗り切ることができた。

それでも就職は簡単に決まらず、そのときに行っていた塾のアルバイトが楽しいことに気づき、そのときに子どもが好きなこと、大人は複雑で苦手ということにも気づいた。

塾では約10年講師を続けており、塾の知り合いの先生から大学講師のお誘いをいただき、今では数箇所講師として勤めることができて幸運だった。

【委員】

中学生のときに周りから浮いていることに気づいてから、英語に打ち込むことで学校生活を乗り切り、それが今の仕事に繋がっている。英語を好きだということに気づいたのは、中学校の英語の先生との出会いが大きかったのか、どこにのめり込むきっかけがあったのかをお尋ねしたい。

【神崎さん】

小学校高学年のときから英語に興味はあった。当時は小学校から英語を勉強する時代ではなかったが、近所に少し英語を話せる人がいて、楽しみにしていた。中学校のときに出会った英語の先生は、人格が素晴らしく、教え方も上手で尊敬できる先生であった。

母は英語をそこまで話せないけれど、語学は音読した方が良いということを教えてくれた。その教えを素直に守り、毎回試験範囲の教科書を丸暗記して言えるようにしていた。本当に英語にのめり込んだのは高校のときで、新聞広告に載っていた「イングリッシュアドベンチャー」という教材を買ってもらい、それにのめり込んで独学で英語を身に着けた。自分は言葉に興味のある方だが、やりだしたらやめられないというのもあったのかもしれない。

1回やりだしたら習慣化するので、半分は楽しかったが、1日でも勉強しない日があると「今日は何も単語を覚えずに終わる」という恐怖感みたいなものはあった。好きという気持ちと止められないという気持ちの両方があったと思う。

【委員】

日本語と英語の文法構造の違いで、日本語はどうしても「間」を読む言語で、英語は主語、言いたいことが先に話の流れの中に来るので、特性のある方にはわかりやすい言語構造であるということをお伺いしたことがある。

このことについて、神崎さんは英語を教えている立場としてどのようにお考えか。教育者の立場として非常に興味深いため、お尋ねしたい。

【神崎さん】

高校のときは、漢文も主語・動詞の順に言葉が並ぶので、古文より漢文のほうが好きだった。

基本的に文化の問題もあると思うが、海外の人に比べたら日本人は複雑性が高いと思う。言語構造が理由なのか、あるいは文化的な背景があるのかはわからないが、それは感じている。

【委員】

英語にのめり込めたのは、英語の先生とうまくコミュニケーションを取れたり、「間」が合ったりしたなど理由はあるか。

【神崎さん】

中学校3年間の英語の先生は実力、教え方ともに素晴らしかった。高校のときは、ネイティブレベルで話せる先生と、全く通じないレベルの先生で二極化していた。教員試験には受かっているのかもしれないが、ネイティブで通じないレベルの先生の授業を聞いていると発音に戸惑ったので、CDをお手本にしていた。私は良い英語の先生に関われたので、恵まれていたと思う。

【委員】

英語だけではなく、人との関わりや、周りの人とうまくやれていたということも、英語にのめりこむきっかけになっているのかもしれない。

【神崎さん】

高校のときは校内が荒れていて全然勉強しない学校だったが、英語だけは1番だった。高校のイギリス人の先生（ALT）が常に私を気にかけてくれて、ありがたかった。

【委員】

神崎さんが好きな英語で先生に恵まれていたことはとても幸運で、また真面目に頑張る姿が先生にとって励ましたい、教えたい生徒だったのだろうと思った。神崎さんが英語に関して一生懸命だった姿が話から浮かんできたのでそう思えた。

中学校のときに周りから浮いてきたと話していたが、あまり人目は気にしていなかったという一言があった。自分が相談を受けるとき、相談者の中には他人の視線を気にして「人がこう思っているに違いない」と思い込んでしまっている人もいるので、神崎さんのようにあまり人目を気にせずにやれたらいいと思う。

人目を気にしないというのはとても主観的なことで、神崎さんは他の人と話をしていても、自分は人目を気にしていないと感じているそうだが、子ども時代のこと、または今現在のことで良いので、人目を気にする、しないということについての考えをお伺いしたい。

【神崎さん】

人目を一切気にしないのは性格かもしれない。

6人兄弟の中で私と長男はアスペルガータイプ、次男はADHDであるが、私と長男は全く人目を気にしない。長男や長女よりも、下の子の方が気遣って家族の様子を見たり、顔色を伺ったりすることかがあるから、長女として生まれたことは関係があるかもしれない。

小学校高学年から中学校のときは、周りの人にかかわられて傷ついていたが、そのことで、自分の行動を変えよう、その人に良く思われようと思ったことはない。だから、どういう感じで人目が気になるのか（わからない）。自分は人に良く思われたいとか、悪く思われたくないと思ったことはない。人目が気になるという人は、私と比べて人に興味があるのかなと思う。

【委員】

人目に敏感になって、人に良く思われたい、今の一言はどうだった、あの人の視線はどうだったと、気になりだすと、どこまでも気になってしまうと思う。そういう意味では、神崎さんはある程度「Going My Way」というか、自分がしたいように生きて来られたようで、私も近づきたいです。

【神崎さん】

教室の端の方で自分のことをコソコソと言われていても、自分には全部聞こえている。先日も塾の部屋の隅の方でオンライン会議があっており、聞き耳を立てているわけではないが、全部聞こえていた。別に気にはならないけれども、コソコソ言われたら不快になる。

【委員】

いろいろと記憶が忘れられなくてフラッシュバックがある中、コソコソ言われていることが聞こえて瞬間的に不快だったとしても、気持ちを切り替えることで、良い時間の過ごし方を選んでいると思えた。

【委員】

24歳の時に診断を受けるに至る経緯について、22歳のときに体調を崩して病院に行ったのがきっかけとのことだが、具体的にどんな症状だったか。

【神崎さん】

ある朝突然起き上がれなくなりましたが、家族はその前から異変に気づいていた。自分でも体調が悪いと思ってはいたが、私はできるところまで（限界まで）行ってしまう。普通の人なら体調が悪いと思ったときに休むことができるが、私にはできない。傾けた首が戻せないくらい疲れていて、妹からうつ病の入り口だと言われたりしていたが、それでも仕事に行っていた。そして、ある朝突然布団から起き上がれなくなり、2ヶ月間その状態が続いた。一時的に仕事に復帰したが、その状態で正社員は無理だったので、アルバイト講師に戻った。

【委員】

起き上がれないのは突然だったのか、それとも前兆があったのか。

【神崎さん】

体調はずっと悪かった。ただし自分の感覚としては、いきなり動けなくなったという理解をしている。ご飯が食べられない時期が続いたり、過食と拒食を繰り返したり、朝起きて声が出ないときがあったりと、体はきつかったが、頭では倒れるまで理解できなかった。普通の人からすると、そういうこと（体調不良）が前兆だったと思う。

【委員】

体調が悪くなった原因は何だったのか、神崎さんの中で紐解けたことはあったか。

【神崎さん】

倒れるまで自分で意識的に休憩を取ったことがなかった。普通の人には、教えられなくても自分で休憩を取り、自動的にオンとオフの切り替えができると思うが、私の場合、起きている間はずっと動いている。今まで休憩してこなかったことが爆発したというか、燃え尽きた感覚である。

【委員】

仕事を一生懸命やろうとするところや、途中で少し疲れ、乗り気ではないことに自分で気づけなくて、目の前の事の方が大事になってきていたことが体調に現れたのかなと推測できた。

【委員】

成長して自分が周りから浮いていることを意識できるようになったのは、精神年齢が伸びてきたこともあると思うが、子どもの頃から、なぜ意識せずに人間関係を保っていたのか。このことは、同じような発達障害の人が成人した後の、人との接し方のヒントになると思う。

それともう一つ聞きたいのは、感銘を受けた英語の先生になぜ入っていったのか、その先生の人格と知識はすばらしかったかもしれないが、パッと見て、単純に外見の好き嫌いや言葉使い、あるいは何かの（物腰の）柔らかさなのかわからないが、先生のことを知る前に、第一印象で魅かれるところは何だったのか。このことは、抵抗感を強く持った人と接する際の、支援者側の対応の参考になると思う。

【神崎さん】

1点目の質問については、おそらく大家族で育ったことが大きいと思う。弟たちの面倒を見ながら育ってきたので、家の中では常に兄弟とのコミュニケーションがあった。だから、小学校の豆ま

き大会の時に休んでいた子がいた際に、自分から「その子がかわいそうだから、全員揃うまで豆まきを待とう」と申し出て、思いやりのある子だと褒められた。

思春期にうまくいかなくなるのは、男女を意識して、ませてくる人が多いからだと思う。子どものときは心根が良くて、正義感があればうまくいくと思う。私はなんでも言う性格だったので失敗はあったが、子どものときは家族の影響と、自分の性格もあって問題がなかったのかもしれない。あとは周りにも恵まれたのかもしれない。

2点目の質問については、英語の先生は非常に痩せた方で、常に白衣を着て、ショートカットできめている先生だった。化粧はしていないが、自然体で好感が持てる外見だったと思う。教え方や性格ははっきりしていたし、評価の仕方など、当事者にとって非常にわかりやすかった。

第一印象で、今でも最初の授業を憶えている。毎回プリントの授業だったが、最初に先生が、「何だか難しいなど感じることもあるかもしれませんが、わからなくて当たり前なのだから。」そんなことを言っていた。「私が今日から1年間英語を教える〇〇〇〇です。よろしくお願いします。」という始め方だった。

【委員】

日本人は年齢が上がれば上がるほど、含みを持たせた言い方、妙な言い回し、裏の意味を取る会話が増えていく。その先生は大事なことを的確に、素直に発言されているところが神崎さんにとって好感を持たれた一つの大きな要因だと考える。

先ほど神崎さんが「人目は気にしない」と言っていたのは、実は気にしないのではなく、気にはなるが、あえてそれを自分の中で無視できる強さを自分の中で育てたのではないかと思う。周りを気にすればさらに浮くし、その中で自分が生きていけないと本能的に悟り、気にはなるけれど気にしていないというもの（感覚、境地）を自分の中で育てていったのかなと思う。

【神崎さん】

委員の皆さんが、私のちょっとした言葉の端々から、いろいろなことを読み取ってくれて感動している。

思春期のころは今より人目が気になっていたと思う。ただ、気にしても仕方がない、気にしても自分がやるべきことは変わらないので、自分は決めたことをやるという強さを育てていくうちに、大人になって気づいたら、全然周りを気にしなくなっていた。

【委員】

私の団体は、軽度の発達障害の子どもが多い。今、コロナ禍で学校が休校になり、環境の変化によって体のリズムが狂う子どもが多い。神崎さんは小学校から中学校、中学校から高校、大学、就職とキャリアを積まれてきたが、こうした（ライフステージ毎の）環境変化の中で、自分のリズム

が掴めずに体調を壊すことはあったか。またその際に家族からの支援はどういうものがあったのか、お伺いしたい。

【神崎さん】

倒れたのは22歳のときだが、大学1年のときは寮生活をして、大学2年で初めて一人暮らしをしたときには体調を壊していた。常に吐き気や気持ち悪さがあって、若さで乗り切っていたが、成績は下がっていた。それを何とか乗り切って、地元に戻って就職した1つ目の会社で朝から夜までの勤務をしていた時、ある日3日連続で仕事に行けなくなった。22歳で倒れるまで、その前の会社でも同じようなことがあって3ヶ月で仕事を辞めたが、せっかちな性格のためすぐ復帰して、結局半年で倒れてしまった。それから何年経っても、以前のように元気になることはなかった。そのときに、日本の社会システムの中では、自分は正社員になる体力がないことに気づいた。

家族の支援については、母が最も私を理解してくれていた。私は普通の人で8時間労働できることが理解できない。朝出勤して夜まで缶詰状態で、お昼ご飯は食べるものの、8時間も縛られていると自分はくたびれてしまう。でも母は「普通の人には自動的に休憩したり、適当に力を抜いたり、力を入れるところと抜くところをわけている。私みたいにずっと張りつめているわけではないからできることなのだ」と教えてくれた。

職を転々としていたときに、ハローワークや職場の先輩に、社会に出たら体調管理ができてないとやっていけないと言われた。しかし、私からすれば無神経な言葉で、家族が理解してくれていたもので、そのことが支えになったと思う。

【委員】

今はいろいろなところに勤めているが、周りの人に自分の特性を伝えているのか。

例えば私の息子は発達障害だが、職場で理解してもらうことができず問題になることがあり、その度に私が会社に行って、特性について説明している。しかし、管理する人はいわゆる健常者の方なので、発達障害のことを理解してもらえない。そんな中で、神崎さんが明確に伝えていないにしても、さりげなく発達障害のことを職場に伝えているのかと思ったが、いかがか。

【神崎さん】

職場には何も伝えていない。伝えようと思ったこともあったが、伝える理由がない。今の塾も6年ぐらい勤めているが、過去に2、3回、1週間休むことはあった。良いことか悪いことかわからないが、周りから元気に見られることが多く、へトへトでも薬局の先生に元気と言われ、休ませてもらえないので過去に2回、診断書を取ったことがある。診断書に発達障害とだけ書いて、上司がそれを見てもメリットがないと思い、体調不良で1週間の入院を要すると書いてもらった。ハローワークでたまに仕事を検索するときは、一応自分も障害者手帳3級を持っているので、障害者の枠で探してみたことはある。

【委員】

神崎さんと同じようなタイプの人が私の事業所にもいる。小説を書く作家で、自分のしたいことを目指して、ある程度夢が叶っている。その人の顔を見てもすっきりしているし、芯の通った言葉で喋られる。そこまで自分に合った仕事、自分を守れるセンサーを身に着けるところまでいかない人が事業所には結構いる。最近も俳優の三浦春馬さんが自殺した事件で、自殺願望のある20歳の若者が「あれだけ簡単に死ねるなら、自分も死にたいので事業所を辞めます」と言う。三浦さんが自殺して3日ぐらいして、その若者の家に行きました。

大学を卒業するとき、なかなか就職のレベルまで到達しない、どちらかというとコミュニケーションが下手な自閉傾向の強い人たちが、大学を卒業するときなどに迷っていることが多い。

塾や大学で英語の講師をされているということですが、私は就労移行支援事業所を1年半前に開所したときに、いろいろな大学に自分の事業所を知ってもらうために営業に行った。大学側も発達障害の人たちが増えていることを認識していたが、大学の支援課や就職課では、在学中や卒業するときに支援が受けられるようなシステムが整っていないのが現状だと思う。神崎さんの目から見ると、大学や塾で、発達障害の人たちが存在していることは目につきますか。

【神崎さん】

大学では2～3年前に会った学生で、学年に2人いました。1人は知的障害を伴う学生で、もう1人は、能力はある方だがコミュニケーションや体調の問題があり、途中から休学になった。

支援体制について、自分は「ウェルとばた」にある障害者基幹支援センターに20代前半ぐらいで出会って、それからずっとお世話になっており、毎回相談している。体調不良も繰り返していると不信感に陥るので、いつでも相談できる理解者に20代前半に出会えてよかったと思う。大学のキャリアセンターの人は冷たかった。就職が決まらなかったら売れ残りのようなことを平気で言う人もいた。なので、何箇所か相談できるところ、窓口があるといいかなと思う。

【委員】

私の事業所で、4月に大学を卒業した発達障害で自閉性が高い人がいる。その人は大学の就職課の職員の方が良く支援してくれた。このまま4年制大学を卒業して社会に出すと、何らかの形でつまづいていくだろうという判断のもと、大学在学中のときから企業に実習に行かせて評価していただいた。そのうえで本人と話をし、支援施設を間に入れた方が就職した後きちんとした定着支援も受けられると判断し、実際に支援を受けているケースがある。

逆に、大学を出たが自閉傾向が強くてうまく人とコミュニケーションが取れず、そのまま引きこもってしまい、3年間引きこもっていた人もいる。私の事業所では在宅就労支援というテレワークの就労訓練を行っており、その方は事業所から2時間ほどかかる遠隔地におられるが、来週会う予定である。

大学を卒業した後のことが、大学を出てしまうとそのままになっていて、支援が充実しているところがまだまだ少ない。このように大学で困っている若者が私の事業所に相談に来ることがあるので、神崎さんには良い事例を多く作っていただきたい。

【委員】

家族の理解があったことや、基幹相談支援センターという相談機関があって良かったと言われていたが、その他に、自分がこの人だったら信頼して相談できるという人がいたのか。

それから、自分の家庭や職場以外に居場所というものがあるのか。

もう一つ、私の部署は相談機関だが、相談者の中にフラッシュバックを抜け出せなくてきつい思いをされている人が多い。フラッシュバックとの付き合い方はどんなことをしているのか。

【神崎さん】

まず信頼できる人については、目の前に実在していなくても、本を読んで尊敬できる人などがあれば心の支えになると思う。私が子供を好きなのは、子どもは嘘がないから無条件に信頼できるため、大人は陰でなにをしているのかわからないという思いが拭えなかった。

家族と理解者以外では、20代までは信頼できる人はいなかったかもしれない。30代になり自分の中で幅が広がってきて極端な人の見方をしなくなったので、その人の受け入れられるところは受け入れて、受け入れられないところは受け入れないという切り分けもできるようになってきた。大人でも信頼して話せる人とは話せるが、そんなに多くはない。

次に居場所は、今コロナで行けていないが、ダンスをやっているときはそこが居場所だったりした。私に合う雰囲気スタジオや先生を探すのは大変だった。しかし一番の居場所は家。心が張り詰めてない、緊張していない場所は家ぐらいしかない。

最後にフラッシュバックは、私も付き合い方に悩んでいる。30歳を過ぎてから、無くそうとするよりは付き合っていくものだと受け入れられるようになってきた。しかし今も寝るときなどは辛い。化粧も落とせないほど疲れ果てて寝るときは、すぐに寝つけるのでフラッシュバックはない。寝るときに少しでも余裕があるとフラッシュバックは起こるので、それに関しては楽観視していない。一度お世話になったことのある横浜の先生が言うには、フラッシュバック自体をなんとかしようとするのではなくて、調子が悪い時にフラッシュバックは起こるものだから、自分の心身を整えることが大事とは言われたが、フラッシュバックは解決していない。

【委員】

先ほどの話から家族に恵まれたということだが、両親の養育スタンスはどういったものだったのか気になる。療育センターでは、発達の早期から親子にどう関わっていくかということが特に大事と考えており、ご両親の養育スタンスについて、今、年齢を重ねてから振り返ってみて気づいたことがあればお伺いしたい。

【神崎さん】

父は子煩悩で正義感が強い人で、周りが駄目だと言っても言うことを聞くような人ではなく、母はそういうところを父に気づかせるようにしていた。母は子どもに対してもそうで、最初から駄目だと否定せずに、自立を促すような養育だった。肯定して育てられたこと、善悪がはっきりしていたことは感謝している。

家族の仲が良いと驚かれることがあるが、ニュースを見てみんな本気で憤っていたり、悲しんだりするのが当たり前だった。父は熱い性格の人だったので、他人を思いやる心、正義感があったと思う。私もいろいろ押さえつけられても言うことを聞かないタイプだった。今は大人になって少しは聞くようになったが、20代前半は言うことをきくことはなかったので、母は気づかせるような、促すようなことをしてくれていた。

【委員】

私達は普段、子どもたちをいかに肯定するかを常日頃、親御さんに説明しているが、そのことがいかに大事なことから、話を聞いて改めて確認することができた。

それ故に、先ほどから話題になっている人目を気にしないというところに繋がっているのではないかと考えている。自分を大事にできるということを育てていくことが大事だなと感じた。

もう一つ質問で、高校のとき英語の先生が二極化していたと話していたが、ネイティブレベルで話せる先生は神崎さんが憧れる存在だったと思うが、もう一人の先生に対して、神崎さんの中でどのように気持ちの処理をしていたのかお伺いしたい。

【神崎さん】

もう一人の先生の授業のときは耳を塞いでいた。発音の違いがわかる人からすると非常に辛いことだった。塾で関わった生徒で、お父さんはアメリカ人、お母さんは日本人、本人はバイリンガルという生徒も、関わっている先生の訛りが強くてどうしても耐えられないと言っていた。

先生を馬鹿にしていたつもりはないが、あまりにも下手すぎて、外国の人が片言の日本語を話すのと同じで耳が疲れるし不快だった。なので、私はCDに出てくる好きな先生を手本にしていた。

【委員】

私の臨床の経験からすると、そういう人に対して攻撃的になる人が多い。許せないというところに感情を持って行って疲労を溜める人がいる中で、神崎さんはご自身の嫌な経験をうまく処理されている。気持ちのコントロールが備わっているところがすばらしいし、どういう仕組みの中で神崎さんの中にそういう力が育ってきたのか興味がある。

【委員】

今の社会の中で、こういうところが変わってきたらいいな、こういう場があったらいいなという思いを話していただきたい。

【神崎さん】

私の性格かもしれないが、私は私、人は人と思っていて、先ほどご指摘がありました、自分自身を大事にする気持ちが自分の中に育っていれば、周りの人も自分のことが大事なのだろうなと私も気づくことができるし、人のことを尊重できると思う。

多数派の人は、自分が多数派ということに気づいていない人も多い。これに対して少数派は追いやられて居心地の悪さがあるからこそ、いろいろな考え方があることに気づくことができる。

私が最も嫌なことは、善悪以外の問題で人から介入されること。どのあたりを常識とするのか判断が難しいところもあるが、自分の価値観を押し付けたりせずに、お互いを尊重できる社会になったらいいと思う。

【委員】

今日のお話の中で、特に最後の一言が大好きな言葉である。私の子どもは知的な遅れもあるが、普段生活していて、お互いを尊重し合いながら生きていけたらと常々思っていたので、非常に感謝を受けた。一つお伺いしたいのは、診断名を告げられた時に最も望んだことは何か。診断名が決まったことで心境に変化があったのか。

もう一つは、その診断名がわかったときに、どんなことが必要だったのか。今、この協議会でもMSPAや初期の診断について勉強しており、診断が下ったことで、その後何が必要だったのかお伺いしたい。

【神崎さん】

長男（弟）が私よりも前にアスペルガーの診断を受けていて、自分も大学のときから発達障害の本は多く読んでいたが、本を読んでいるときには自分が発達障害だとは思っていなかった。自分が見えていなかったとも言えるし、本に書いていることがそのまま当てはまるような典型的な（発達障害の）人ではないということでもある。

いずれにしても、すでに発達障害のことを本で読んでいたので、診断名を告げられてもさほど驚かなかったのと、半分は「本当かな」という気持ちもあり、個性の範囲という見方もあるだろうなと思っていた。だが、歳を重ねて自分の思考パターンや行動を振り返って、やっぱり当事者だなと思うようになった。診断前の段階で準備があったからかもしれないが、診断名を言われても何も思わなかった。

診断が下ってから必要だったことは、最も現実的なところでは疲れが実感できないこと。疲れが自分ではわからないことを自覚して、あえて一週間休むなどの体調管理が必要と思う。気持ちの面

では、社会から「ぎこちない、常識がない」と言われても、そんなことは関係ない、自分は自分で良い、大人の文化と一緒になりたくない、自分は変わらないと思っていた。

【委員】

私はよく、発想障害の人はコミュニケーションが苦手だから、健常者の人から歩みよるようにと言っている。今までの神崎さんの話を聞いていて、発達障害の特性は良い悪いではなく「違い」である、そういうところに神崎さんは自己肯定感を持っていて、「私は雑談なんかしないで仕事している」というように、むしろ他の人より優越感を持っている感じがする。

神崎さんは多くの経験を積まれてここまで来たから、今となっては、雑談をする周りの人にも歩みよることができるまで来ているのかと思うが、いかがか。

次に、実際にこの会議に参加してみて、この会議のことをどう思うか。今まで当事者の人がここまで会議に参加することはなかったが、当事者が会議に参加するという点について、どのようにお考えかお伺いしたい。

【神崎さん】

20代半ばぐらいが最も辛かった。薬も飲み、3年ぐらい出口のないトンネルを歩いているような時期もあったが、当時紹介された関東の発達障害専門の先生がいて、その先生との出会いが大きく、3年ぐらい相談に乗ってもらっていた。その先生の言葉が次第に理解できるようになってきて、良い意味で居直りが必要であること、関東の方では一般社会の文化の方がおかしいと居直っている人もいと教えてもらった。

年齢の関連もあるだろうし、家族に恵まれたことや、自分に仕事を20代の段階で見つけられたこととか。あとは29歳になる手前で、初めて自分が大人になったなと感じたときがあった。自分の中で少し余裕が出てきたところはあると思う。今までだったら親にも反抗して終わっていたが、どちらかといえば、親の愚痴を聞いてあげるぐらいになれた。

良い意味で開き直ることができたのは、大人との関りが上手くいかなくても、子どもと関わったら上手くいくという自信があったから。塾でも、最初は変な雰囲気から浮いているみたいだが、塾では子どもと関わる場所を見て評価されるので、一定数の生徒を確保して他の講師には負けないという思いはあった。

この会議については、私の文章や言葉の端々に対する皆さんの理解が深く、びっくりしている。私は家族以外でこんなに理解されることはなかったのだから、障害者基幹相談支援センターや、理解してくれる人でないと相談することもできない。下手に相談して体調管理ができていないのは自分が悪いと言われ、嫌な思いをしてきたので、理解してくれる人たちも一定数いることを実感してびっくりした。当事者が話すということについては、20代半ばぐらいのときに、発達障害者支援センターつばさが主催の会があって、そのときに当事者の方が体験発表されているのを聞いて、感動して共感できた。当事者が話すことはすごく良いことだと思う。

【委員】

大変なことも含めて普通に話していただき感謝する。支援や配慮が必要なことも学ばせていただき、多様性や尊重し合う、お互いを大切にするなど、ごく普通なことが大切であるし、そういう社会をどう作っていくのかということも大きなビジョンで大切なことだと改めて気付かされた。

【傍聴者】

神崎さんの話に大変共感できた。基本的にどういう特性があるのか、もう一度お伺いしたい。

【神崎さん】

やり出したことが習慣化してしまう癖があり、気に入った言葉やフレーズ、英語でも日本語でも気に入るとずっと言ってしまう。今は言わないが、家の中では独り言をずっと言っている。

20代で体を壊したときから街に落ちているゴミが気になって拾い始めて、それも習慣化してやめられなくなっている。今もコロナ禍だが、目についたゴミを拾ってしまう。良くも悪くも習慣化してしまう特性がある。

【傍聴者】

習慣化できるというのは、ASDの特性の中で良いことだと思う。習慣化するといろいろなことができるようになるので、とても良いと思う。

もう一つお伺いしたいのは、神崎さんは英語が自分の特性にあっていたと思うが、それは独り言で全部暗記してしまうところから来ているのか、または好奇心なのか。英語を使ってコミュニケーションをすることになるので人間関係も影響すると思うが、そのところをお伺いしたい。

【神崎さん】

独り言もあるが、私はモノマネが得意で、子どものときからモノマネをして友達や母を笑わせていた。だから英語も発音を真似るのが得意だったと思う。初めて聞いた言葉でも真似できた。

しかし、大学時代に英語でいろいろな人と関わる中で、雑談が不快だった。なぜ不快だったか自分でも気づかなかったが、英語だろうと日本語だろうと雑談は嫌い。でも今は目的を絞って、用事があるときだけ人と会い、電話やメールも基本的に同じ目的を共有している人とししか関わらないので、それで何とか生活できている。

【傍聴者】

好きなことを仕事にできて成功されているので、羨ましいなと思った。

(閉会)